

キク科ニガナ属の多年草。日本全土の野原、林縁、土手、耕地周辺の畦畔などの日当たりの良いところにごく普通にみられる。背丈は20～50cm、茎は細長く直立し上部で枝分かれます。根生葉は柄が長く葉身は3～10cmほどあるが上部の葉には柄はなく、基部は丸く張り出して茎を抱く。

花期は5～7月。枝の先端で枝分かかれし集散花序に1.5cmほどの黄色い頭花をつける。頭花は普通5個の舌状花からなり、先端は5裂する。雄蕊は5個で筒状に合着し、先端が二つに分かれた雌蕊を抱く。キク科には珍しく頭花はタンポポのように多数の舌状花が集まった花ではなく一重咲きの花のようにすっきりとして、他のキク科植物とは比較的区別しやすい。

在来種で、古くから身近な花であったが万葉集や古今和歌集などに詠われることもなく、今に至るまで季語として取り上げられることもなかった。しかし漢方としては古くから知られていたようで、平安時代前期の918年に編纂されたという薬物辞典である「本草和名」には「小苦賣しょうくばい」として記載されていたようである。決して目立った花ではないが、この楚々として見るからに儚げなニガナの花に、紫式部や清少納言、さらには多くの歌人たちは想いを馳せなかったのだろうか。例えば「楚々なるもの。苦菜。茎の汁は苦きこと物にはあらず」などとあってもいいのかと思うのだが。

ニガナは茎や葉を切ると白っぽい乳液がしみ出てくるが、これを舐めると苦いが、茹でたり水に晒したりすることで苦みも和らぎ、食用にもできるので苦い菜ということで苦菜の名がある。

以前、南伊豆を訪れたことがあった。列車を降りてバスに乗り換え、車窓を眺めていると川沿いに植えられている桜が満開で、薄い桜色の花が次々と目に飛び込んできた。春真っ盛りであった。バスがカーブを大きく曲がると、バスが走り抜けるときの風に煽られて、道の上にトンネルのように覆いかぶさっている桜の木からは花びらがハラハラと散り始めていた。

バスを降りて宿に入る。宿の入口の手前に車がやっと通れる

須藤 健一

かという幅の道があり、この道も両側からの桜が空を覆っている。ここの桜の道は、少しばかり暖かいのだろうか、道は花びらで覆われていた。

宿の裏は川に面し、庭を抜けて川に繋がる散策路がある。散策路を抜けて川の土手の石段を下りると左右に黄色と白の群落が広がっていた。黄色い花はカラシナの群落で、白い花はハマダイコンの群落であった。

石段を土手の上まで戻ってくると歩道の縁にナズナやヤハズエンドウ、オオイヌノフグリなどに混じってセイヨウタンポポがあちこちに花を咲かせていた。ここも春真っ盛りであった。

その後何年かして同じ南伊豆を尋ねてみた。すでに5月になっていたこともあり、桜は新緑の葉で覆われていた。宿の裏の川の土手には種を付けて少し枯れかけたカラシナとハマダイコンがまだ咲いていた。土手の上にはウシハコベが群れ、オランダミナグサも目立たない花を付けていた。それらに混じって黄色い可憐なニガナの花も5月の風に揺れていた。

